

## 関連学会印象記

# 第23回日本心臓血管外科学会

中野清治\*

本大会は平成5年3月3日、4日、5日の三日間福岡市福岡サンパレスにおいて、九州大学医学部心臓血管研究施設外科部門、徳永皓一教授により主催された。学術集会、展示、諸関連会にわたり行き届いた大会であり、まずは実際に運営をされた事務局の方々には大変ご苦勞様であったと申し上げたい。この心臓血管外科学会は年々拡大の一途をたどり、その規模、学術内容の新規性、充実性からみても胸部外科学会に匹敵する会に成長してきたようである。ちょうど米国におけるSTSとAATSの関係のようにこの分野を二分する二大学術集会となると思われる。開催時期も秋の胸部外科学会に対し、春の心臓血管外科学会とどちらも準備期間が半年あり充実した演題が期待出来る。今後 official journal である日本心臓血管外科学会雑誌のいっそうの充実が期待される。

学術集会の企画の試みとしては、招請講演に海外から7名もの多数の講師を招いた点。それから、一般演題中、高い得点を得た上位15題を会長推薦演題として、シンポジウム、パネルディスカッション演題と同列に扱い、栄誉を与えるとともに本学会学術雑誌に掲載することにした点が特徴的であった。

海外における新進気鋭のその道の大家による最先端の内容を、幅広い分野に渡り聞く機会がもてた事は非常に幸運であり深く大会長に感謝したい。ただ、どうしても抜けられない他のセッションと時間帯が重なり、いくつかの貴重な講演を聞く機会を逃したのは非常に残念であった。同じ思いをされた方も他にも多かったのではないと思われる。

会長推薦演題はプログラム委員の先生方が高得点をつけた演題だけあって、さすがにどれも内容の充実した originality の高いものであった。大会長の主観にとらわれず、純粋に高得点を得た上位の演題を選ばれた点も注目に値する。多くの学会において、シンポジウムやパネルディスカッションなどのテーマからはずれた場合、非常に質の高い演題であっても、特に関心を持っているかたがた以外からはなかなか注目されにくいものである。また、新機軸をうちたてた originality の高い新しい仕事はむしろ、シンポジウムなどのテーマとは無縁のものである場合も多い。このような点からも、今回の企画は多くの会員の励みになった事と思われる。

シンポジウムは「現行心筋保護法の問題点とその対策」、「新生児開心術の補助手段の工夫」、「重症疽血肢に対する外科的治療成績と成績向上のための対策」という題で行われた。最初のテーマは基礎的実験と臨床データの両面から、後2題はそれぞれの成績向上のための工夫と成績が発表された活発な討論が行われた。

パネルディスカッションは「私ならこうする」という題で、僧帽弁形成術、遠位弓部大動脈瘤に対する手術術式の工夫、について演者の発表と討論が行われた。いずれもここ数年来のトピックであり、多くの討論が行われてきたにもかかわらず、いまだ幾多の問題を抱えているテーマである。「私ならこうする」というタイトルの如く討論はもっぱら、その具体的な手術手技についてであり、いままでとはひと味違ったつっこんだ内容であった。僧帽弁形成術に関してはかなり細かい手技上の工夫について討論がなされた。遠位弓部動脈瘤に関してはやはり、脳保護とアプローチの仕方が

\*東京女子医大心研循環器外科

問題となりそれぞれの意見が交換された。

そのほかなんといっても人気が高いのはビデオセッションである。この部門は年々演題参加施設も増え、画像、画質ともに充実してきた。各施設とも学会演題締切に合わせてビデオをとるというよりは、貴重な症例はビデオに記録しておき、それぞれの学会のテーマに合わせてその都度過去に記録しておいたビデオを提出しているようである。今回どのビデオセッションも会場に入りきれないほどの人ばかりであった。会場内のスクリーンが見えにくい位置や、会場外、さらにはロビーにまでビデオのディスプレイをもうけ、なるべく多くの人が見る事ができるように工夫がなされていた。この学会が外科医の集まりである以上、最も具体的に手術手技を伝えることのできるこのセッションは今後ますます参加者が増える事がよそうされる。ビデオの場合あまり大きなスクリーンであると、画像が暗くなったり画質が落ちるので、ある程度会場の広さに制約を受けざるを得ない。今回主催者側の苦勞がうかがわれた。

さて、今回もう一つ新たなことは、これまで本学会の joint session としてプログラムに組み込まれていた ISCVS Asian Chapter Session が独立した学会となったことである。その第一回大会が久留米大学第二外科、大石喜六会長により本学会の前日の3月2日に同会場にて開催された。アジア各国からの参加があり、特に福岡という地の

利が生かされ韓国、台湾からは多数の参加者があり、大会を盛り上げた。招請講演は台湾の Dr. Shu-Hsun Chu (National Taiwan University) による“Current Status of Cardiovascular Surgery in Taiwan”と米国の Dr. Joseph S. Coselli (Baylor College of Medicine, Houston) による“Current Techniques in Aortic Surgery”の二題であった。Dr. Coselli は Dr. E Stanley Crawford のもとでトレーニングをつんできた若手の血管外科医であり、Dr. Crawford の訃報を伝えるとともに、彼に勝るとも劣らない立派な最近の成績を示した。Dr. Crawford の偉大な業績と技術が次の世代に着実に継承された事が示され感慨深いものがあった。シンポジウムは「Surgical Treatment of Valvular Heart Disease」について行われ、弁膜症治療のアジアにおける重要性がうかがわれた。

そのほか関連研究会として、日本心臓移植研究会、不整脈外科研究会、逆行性臓器灌流研究会が開催された。

福岡の地で本学術総会が開かれたのは19年ぶりとのことである。福岡は食通のあいだでも有名な街、また日本でも有数の歓楽街である中州をひかえている。日頃体力に自信のある心臓血管外科医諸氏は、昼に夜に充実した3日間を過ごされた事と思われる。